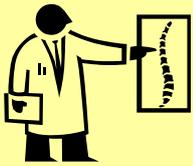


伊藤外科ニュース



92号

2012.02 発行

手足の先が凍りつき、頬が痛いほどの寒い日々が続く1月の後半でした。この時期は、公園の景色も寒々として気持ちも落ち込みがちですね。そして、僅かの間の日差しがとても心地よく陽光の有難味が良くわかります。

ところで、我が家にはウサギの「クロ」がいます。私たちの家族になり早くも8年が経ちました。

年齢からするとかなりの爺さんですが、毛並みもよく食欲旺盛です。それでも寒さには弱い様で、この時期は陽だまりや暖房の効いた部屋の中でぬくぬくと暮らしています。

一番世話をしない私にもよって来るので、私は寒い夜の遊び友達として「クロ」から認知されているのだらうと喜んでいきます。

長期予報によると2月も寒い日が続くようですね。風邪を引かないように、またメタボにならないように注意しながら梅の咲くのを待ちましよう。



胃の検査のおはなし

さて、今回は人間ドックや企業検診で最近時々行われている「ペプシノーゲン法」による胃の検査について少々お話しいたします。

詳細は書面の都合で省きますが血液中のペプシノーゲンという物質を測定し、以前お話ししたピロリ菌による慢性胃炎の有無や程度を推測しようとする検査がペプシノーゲン法です。

厄介なことに、この検査の異常を指摘された方が、自分が胃がんと診断されたと思われたり、異常がなければ胃がんではないと誤解されることです。現状では採血検査では胃がんの診断はできません。

そこで、ペプシノーゲン法とピロリ菌の抗体を測定した結果を組み合わせて胃がんになり易い人であるか否かを検討するABC検診(採血検査)が注目されています。

この検診は一部の地域で始まっています。ABC検診も前述のように胃がんを判定するものではありませんが、胃カメラを受けた方が良いかの目安となりそうです。胃に不安がある方、健診に興味のある方は医師に相談ください。

1月の末時点で、西新宿の地域にはこの寒さに反してインフルエンザの患者さんが例年より極めて少数です。

しかし、近隣区の医療機関からは流行の兆しの報告が来ています。また、今年は「しもやけ」の患者さんが多くいらっしゃいます。本当に寒い冬を大事にお過ごしください。

院長 

伊藤外科 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)



今回の一冊

仁淀川

著者 宮尾登美子

このところ、やたらと「小説」が読みたくてしょうがない。活字に関わる仕事をしているが、日ごろは資料としてノンフィクションや学術系のものを読まざるを得ない。そうしたものが続くと、無性に小説が読みたくなるから不思議だ。

出世作『櫛』を初め、数年前に大河ドラマにもなった『天璋院篤姫』の著者として知られる宮尾登美子は大正 15 (1926) 年の生まれである。氏の自伝的四部作といわれる小説の第一作目『櫛』が発表されたのが、1972 年。宮尾氏 46 歳のときである。そして今回、三弓の本棚から拝借して読んだ完結編の『仁淀川(によどがわ)』が発表されたのが 2000 年。28 年の歳月をかけて、その半生が綴られたことになる。

ご存知の方も多いと思うが、宮尾氏は土佐・高知の生まれ。芸妓娼妓紹介業を営む生家の両親の波乱万丈な半生を軸に幼少期を描いた『櫛』、多感な思春期を描いた『春燈』、大陸での新婚生活と引き上げの壮絶な日々を描いた『朱夏』、そして引き上げ後の土佐の農村での暮らしと父母の死までを描いた『仁淀川』(ちなみに、仁淀川は高知県を流れる一級河川)。宮尾氏が小説を書き始めたのは、引き上げ後の農村生活時代、つまり『仁淀川』で描かれている時代だが、本格的な作家活動を始めたのは離婚・再婚を経験し、故郷を去って上京した 40 代に入ってからのことである。

前述したように、これらは「自伝的四部作」といわれている。うっかりすると、まんま著者の人生が描かれていると思いがちだが、そこは「自伝的」である。いや、「的」がついてなくても、ともすると世の中のエッセイだって、現実がそのまま描かれているわけではない。物書きというのは嘘つきな生き物だからそこは勘違いしてはいけないのだが、嘘をつきつつ、真実を描こうとするのが作家だ。

宮尾氏の作品で一貫してテーマとなっているのは「女性」と、その生き様である。『仁淀川』では、父親の職業や複雑な家庭環境と葛藤しながらも町方の娘として奔放に育った主人公が、農家の嫁として生きる日々の葛藤を描いている。戦中・戦後の時代でも、町暮らしと農村暮らしとは生活感覚が随分と違ったんだなあ。町方では筆筥などの嫁入り支度などしなくなっていた時代に、農家では筆筥も持参しない嫁は恥とされて、そのことが結婚後数年たっても尾を引くあたりの話にはちょっと驚く。小説の本題とは若干ずれるかもしれないが、当時の農家暮らしの日常や生活概念が垣間見れるところも、ワタクシとしては興味深く読みました。

宮尾氏の小説の主人公は、時代や社会といったある囲いのなかで、それでも自分の足で立って生きていこうとする女性が多い(数冊しか読んではいないが)。そのほとんどが古い時代の女性たちだ。経済至上主義の弊害は多々あるとはいえ、女性にあらゆる可能性が開かれた(幻想だとは思いますが)平成の世は、宮尾文学の舞台にはならないのだろうか。

(一弓)